

## 情報社会における自立した高齢者 ーシニアネットをモデルにー

豊留 沙梨那

本研究の目的は、高齢化ならびに情報化が進む現代において、主体的で自立した高齢者とはどのようなものか（老年学の視点を踏まえて）考察すること、シニアネットをモデルに、担い手として活躍する高齢者たちの現状を把握し実現への課題を探ることである。研究課題は、（１）超高齢社会における高齢者の実態と現状を明らかにすること、（２）シニアネットの活動の変遷および現状と課題を明らかにすること、（３）情報社会における自立した高齢者の実態と課題について考察することである。

本研究では、文献調査を実施した。まず、超高齢社会における高齢者の実態と現状を明らかにすることを目的として、学術論文、専門書、事典、ハンドブック、官公庁資料を対象に、文献調査を行う。まず、本学図書館にて分類番号 367.7「老人問題」の専門書から、関連するキーワードを収集し、①日本における超高齢社会の現状、②高齢者ならではの特性、③高齢者を取り巻く課題、④高齢者の生き方に関して提唱されている概念という４つのトピックを設定した。次に、シニアネットの活動の変遷および現状と課題を明らかにすることを目的として、学術論文、専門書、新聞記事、関連団体のウェブサイトを対象として文献調査を行った。シニアネットの活動内容については、2000年代までの動向は主に論文や図書を、2010年代から現在にかけては先行研究でまとめられた巻末のシニアネットの団体一覧リストと一般社団法人ニューメディア開発協会のリストをもとに団体のウェブサイトへアクセスし確認した。またシニアネットに関する新聞記事を1990年代から2020年代にかけて収集し日本におけるシニアネットの変遷と現状を調査した。

これらの調査結果から、高齢化ならびに情報化が進む現代において主体的で自立した高齢者とは、少なからず疾患を抱えながらも ICT を利活用して活動領域を広げ交流を行い、蓄積した知識・経験を発信・共有する存在であると考察する。アクティブシニアとデジタルシニアの概念を掛け合わせた存在であり、実現した例に「シニアネット」が挙げられる。シニアネットでは、第一に情報機器の取り扱うスキルを身につけ、第二に培ったスキルを利用し実践的な活動を行い、第三に成果物やノウハウを共有・提供し、第四に団体の括りに縛られず他機関との連携する、以上の仕組みによって高齢者が支援の受け手から担い手へと移行している。高齢者と ICT を取り巻く課題にグレイ・デジタル・デバインドやデジタルイミグランドが挙げられるが、シニアネットでは同世代間ならではの「共感」を通じたコミュニケーションによってこれらの障壁を乗り越えていると考えられる。「シニアネット」をモデルに、社会的弱者や情報弱者という負のイメージを払拭し支援の受け手だけでなく高齢者の持つ潜在能力を活かし社会の担い手として捉えた検討が広くなされることが望まれる。

(指導教員 呑海 沙織)